

都道府県別賞一等

祖父が愛する人に託したもの

熊本県 熊本市立白川中学校 二学年

楠田 菜々美

いつ病気になるのか、亡くなるのか、なにがあるかわからない人生だからこそ、生命保険と向き合うことが、自分の将来の人生と向き合うことになるのかもしれない。

二年前、私の祖父が亡くなった。原因は、まだ治療法の見つかっていない難病だった。

私の祖父は、私が幼い頃はとても元気で、公園で一緒に遊んでくれたり、車でよく買い物に連れていってくれた。私の両親が共働きということもあり、病気になるってしまった時はいつも面倒を見てくれた。また、夕方のテレビで相撲を見たり、彫刻刀で仏像を作ったり、焼酎を飲んだりすることが大好きで、私が会いに行くたびに好きなことに没頭していた。そして、会いに行くたびに、「ななみ、よくきたな」と言ってお出迎えてくれた。

しかし、いつしか病気が見つかり、祖父が歳を重ねると同時にだんだんと元気がなくなり、病気の症状が現れ始めた。手足の震えがひどくなっていき、思うように体が動かず、まともに歩くことも難しくなってきたため、今までできていたことがだんだんとできなくなっていた。

やがて病院の入退院を繰り返すようになった。私は何度もお見舞いに行った。リハビリを一生懸命頑張っている祖父の姿を見て、私はお見舞いのたびに、メッセージを書いたプレゼントを作って渡した。そこにはいつも、「はやく元気になってまた一緒に遊ぼうね」と書いた。まだ小学校低学年だった私は、また前みたいに元気になって、一緒に遊べるようになっていた。残念ながらもその願いが叶うことはなかったが、祖父は私がそれをあげるたびに喜んで病室に飾ってくれた。話すことも難しくなっていた祖父だったが、体力を振り絞って、ゆっくりと「ありがとう」を伝えてくれたことを今でも鮮明に覚えている。

新型コロナウイルスの影響で、祖父との面会が難しくなり、久しぶりに会った祖父の姿は、ベッドに横たわって、元気も体力もないような姿だった。「ななみ、よくきたな」と言ってくれなくなったことに寂しさを感じた。それでもいろいろな人の支えがあり、最後まで懸命に生きてくれた。そして、祖母に全てを託すかのように静かに息を引き取った。私は、とても悲しかったし、辛かった。しかし、それ以上に祖父と長い時間を共に過ごしてきた祖母や息子である父と父の兄の方が悲しみや辛さが大きかったと思う。特に祖母は、愛する人が亡くなったことへの

第62回中学生作文コンクール

辛さ、これから一人で生活することへの不安が大きかったと思う。それでも悲しみを乗り越え、今は一生懸命生活をしている。私の祖母は、高齢のため働いておらず、年金で生活をしているが、生活が守られている。そんな祖母を支えているのは私たち家族の力だけではないと考える。祖父が託したものの、生命保険の力だと考える。

祖父は以前から生命保険に加入していたらしく、自分の分まで長く生きてほしいという祖母への思いから、祖母に生命保険を託したと思う。生命保険は、祖父の入院時の入院費、治療費、死後の葬式費用、現在の祖母の生活費用に活用されている。病院や葬式は悲しい場所だと思われがちだが、思いや今までの感謝を伝える場でもあると考える。そのような場を設けてくれた祖父、生命保険には感謝しかない。

生命保険に入ること、もしなにかあった時、家計への負担の軽減や生活資金など様々な支援を得られる。だから、私も祖母も前を向いて人生を歩んでいける。それが生命保険の本来の目的なのではないだろうか。なにがあるかわからない人生の一秒一秒を大切に、亡くなった祖父の分まで長く生きたい。

「じっちゃん、これからも空の上から見守っていてね。」